

# たまとして生まれ



作 / 森野奥人



# 目次

たまとして生まれ .....	1
----------------	---



たまとして生まれ

たまとして生まれ

「わたしは、もう生まれ出ることはできないのかな」

ひとつの命が悲しそうに、ぶたいの上のできごとを見るように、あの世からこの世の光景を

ながめていました。

いま、目の前に見ている男の人を、お父さんとして生まれてくるはずのさだめの命でした。

でも、この人はお母さんになる人とうまくめぐり会うことができず、老人になろうとしていました。

「神様。この人に少しでいいから甘えたいんです。どうか見すてないでください」

そうした何十回目かの祈りのときでした。

うずまきが近づいてきて、この命をいっしゅんのうちに巻き込んだので、命は気を失いました。

「みゃーみゃー」

「みゃー」

気がつくど、なかまたちがとなりにいました。

自分も「みゃー（おなかすいたよう）」としか言えません。

そこは、高層団地の立ち並ぶところで、その間にできた公園の茂みの中でした。

命は、めすの子猫として生まれたのです。しかし、いきさつを何もかもわすれていて、

ただあたたかい母猫にすり寄って、乳を飲むのがせいっぱいでした。

でも、そんなおだやかな日は長くありませんでした。

ある日、自分の食べものをさがしにいった母猫は、もう帰ってきませんでした。

母猫は、はじめ人にかわれていたのですが、子供がおなかにできたときにすてられ、

公園の茂みの中で、4匹の子猫を生んだのです。

少しえいようをつけようと、えさをあちこちとさがし回るうち、なれない道路に出て車に

ひかれてしまったのでした。

子猫たちは、めいめいで生きていくしかありません。

おなかのすいたなかまは、一匹また一匹と茂みを出ていきました。

中には運よく、人にひろわれたものもいたようですが。

「みゃー」<おなかがすいたよ>

めすの子猫もえさをさがしに茂みを出ましたが、ととのった団地のこと、ほとんどえさ

らしいえさは口にできませんでした。

3日目になると、もうひよろひよろでした。

冬がはじまるころで、冷たい風が吹きつけました。

「みゃー」 <さむいよ>

まわりのけしきも人もすべて大きく、怖いもののように見え、ただやみくもに歩きました。

ふと、道路を横切ったとき、大きなものかげがとてもあたたかいのに気づき、そこにとどまることにしました。

実はそれは、赤信号でとまったタクシーの下だったのです。

しかし、さすがにタクシー運転手でした。

子猫が車の下にもぐったのを見て、それきりなのでしんばいになり、外へ出て下をのぞくと、

あんのじょう、子猫がタイヤにすり寄るようにしているのです。

「こらこら、あぶないぞ」と、運転手は手を伸ばして子猫をつかんで、そばのうえこみの

ところにおき、車にもどりますと、また子猫は車の下に走りこみました。

信号も青に変わり、運転手は手ぶりで後ろにきていた車にあやまりながら、また子猫を

つかみだします。するとまたもとにもどってしまいます。

こうしたことを3回もくりかえすと、運転手もわけをさとります。

「そうか、わかった、わかった」と、あたたかい車の中に入れてやり、ミルクを買ってきて

飲ませてやりました。

「ちっちゃいやつやなあ」

子猫はおとなしく、ざせきの上でじっとしてうずくまっていたので、運転手はもと

のところ

にもどすのがかわいそうになり、仕事を早く切り上げて、家につれて帰ることにしました。

車から家まで、運転手の両手にのせられてはこぼれるとき、子猫の心になぜかいいあわせ

ないよろこびがわいてきて、「ごろごろ」とまんぞくそうにのどを鳴らしました。

そうです。この運転手こそが、この命にとってのお父さんになるはずの人ではなかったのでしょうか。

ふしぎなめぐりあわせでした。

しかし、この人は、それほどうれいわけではありませんでした。

自分の将来のもんだいが山積みになっていたのです。

おまけにこの人も、この人の家族も、動物を家の中でかうことがきらいでした。

それでしかたなく、家の2階の小さなベランダが子猫にあたえられ、毛布と、トイレ用の

砂場が用意され、またこのときに、「たま」という名前がつけられました。

たまは、この人に甘えたくてしかたがありませんでしたが、この人は仕事から、あまり

帰ってこないし、家にいてもえさをやるときしか来ませんでした。

戸は閉められたままで、たまはさびしくベランダであそんだり、毛布に入って寝ているのでした。

それでも、ひさびさにこの人が来ると、寝ていてもすぐに起き出してきて、すり寄って、

せいっぱい甘えました。それはもう、犬にもひけを取らないくらいでした。

ところが、やがて良くないことに、この人は、もんだいの解決をあやまり、ひどく落ち込んだ

でしまったのです。

八つ当たりでしょうか。すり寄るたまの手足をせんたくばさみではさむと、たまはあまりの

いたみにびっこを引きました。でも、いたがりません。

また、首ねっこをつかまえて、となりの家のやねに放り投げました。

まだやわらかい足のうらは、ひどくいたみました。でも、たまは、いたくないよと、じょうずに

飛んでもどってきました。

<どうしたら、気に入ってもらえるんだろう>

ところが、ある日、こんなことを言われました。

「たまよ。お前が来てからろくなことがないよ。お前はもともとのら猫だったし、

それが猫にとっていちばん幸せだと思う。おれはお前が一人前になるまでえさ

だけはやろう。だが、そのうちここを出ていきなさい」

たまは、表には出ませんでしたでしたが、言われたことがよく分かり、すごく悲しくなりました。

それからは、同じように甘えてみせても、ひかえ目にして、この人のごきげんをうかがう

ようになりました。

そんなある日、近くに住んでいるのら猫が、ベランダのすぐ横にやってきました。

「おい、お前。だいぶ前からここにいるようだが、かい猫ならともかくも、のら猫なら、

このへんはおれさまのなわぼりだ。出ていってもらわにゃならんな」

「わたしは、かい猫よ」

「だが、お前、家の中に入れてもらえないでいるじゃないか。それでもかい猫と言えるかよ」

「家の中にも入ってるよ」

「ほーお。だったら、家の中に何かがあるか言ってみな」

「・・・」

そんなことがあって、この人が来るたびに、開いた戸のすき間からなにか家の中に入ろう

としました。

うまくこの人の手をすり抜けて入ると、見たこともない部屋のなかでした。

「こら、待て」と追いかけてくるのを、ものかげにかくれて、やり過ごそうとしましたが、

目につくものをおぼえておこうとする前に、つかまってもとにもどされてしまいました。

「こまったやつやなあ」

そのようなおいたをしたぶん、この人が来ることも少なくなりました。

それでも大きくなって、人でいえば、15、6才というところでしょうか。もう自分だけで

やっていけると思うようになったある日、やくそくを守ろうと決心しました。

ベランダからおりて、1階の窓に面したへいの上から中をのぞくと、あの人の家族がいました。

あの人がいなくなるときに代わりにえさをくれた人です。

「ニャーン」となくと、その人は気がついて、窓からのぞき、「おや、どうしたの」と言いました。

そのとき、3けんとなりの家の犬が、たまに向かってさかんにほえました。

たまは、もういちど、その人をふりかえって見て、「ニャーン」<さようなら>と言いました。

そして、へい伝いにそこを去って行き、再びすがたを見せることはありませんでした。

家族からそのことを知らされた運転手は、言い聞かせておいたこととはいえ、思ってもみない

できごとに、はじめてたまにたいして、もうしわけないことをしたと思いました。

そして大切な肉親をなくしたような気持ちになりました。

そして、ふとつぶやきました。

「いつでも帰ってこいよ」と。

---

たまとしてうまれ

---

著 森野奥人

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---